

好色五人女　八百屋お七

井原西鶴

ここに、本郷のほとりに、八百屋八兵衛とて売人ばいにん、昔は俗姓賤いやしからず。この人ひとりの娘あり、名はお七といへり。年も十六、花は上野の盛り、月は隅田川の影きよく、かかる美女のあるべきものか。都鳥その業平に、時代違いにて見せぬことの口惜し。これに心をかけざるはなし。

この人火元近づけば、母親に付き添ひ、年ごろ頼みをかけし旦那寺だんなてら、駒込こまごめの吉祥寺といへるに行きて、当座の難をしのぎける。この人々に限らず、あまた御寺みでらにかけ入り、長老様の寝間ねまにも赤子泣く声、仏前に女の二布ふたののものを取りちらし、あるいは、主人を踏みこえ、親を枕とし、わけもなく臥ふしまろびて、明くれば、鏡鉢ねうはち、鉦どらを手水盥てうづだらひにし、お茶湯天目ちやとうてんもくもかりの飯椀めしわんとなり、このうちのことなれば、釈迦しやかも見許したまふべし。

お七は母の親大事にかけ、坊主ぼうずにも油断のならぬ世の中と、よろづに気をつけはべる。

【中略】

やごとなき若衆わかしゆの銀しろがねの毛抜き片手に、左の人差し指にあるかなきかのとげの立ちけるも心にかかる、暮れ方の障子をひらき、身を悩みおはしけるを、母人見かねたまひ、「抜きまゐらせむ。」と、その毛抜きをとりてしばらく悩みたまへども、老眼のさだかならず、見つくることかたくて、気の毒なるありさま、お七見しより、「我なら目どきの目にて、抜かむものを。」と思ひながら、近寄りかねてたたずむうちに、母人呼びたまひて、「これを抜きてまゐらせよ。」とのよし、うれし。

かの御手を取りて、難儀を助け申しけるに、この若衆我を忘れて、自らが手をいたくしめさせたまふを、離れがたかれども、母の見たまふをうたてく、是非もなく立ち別れさまに、覚えて毛抜きを取りて、帰りまた返しにとあとをしたひ、その手を握り返せば、これよりたがひの思ひとはなりける。お七、しだいにこがれて、「この若衆いかなる御方ぞ。」と、納所坊主なつしよに問ひければ、「あれは小野川吉三郎殿と申して、先祖正しき御浪人衆なるが、さりとはやさしく情けの深き御方。」と語るにぞ、なほ思ひまさりて、忍びの文書ふみきて、人知れず遣はしけるに、便りの人かはりて、結句吉三郎方より、思はくかずかずの文送りける。心ざし、たがひに入り乱れて、これを諸思もろおもひとや申すべし。両方ともに返事なしに、いつとなく浅からぬ恋人、恋はれ人、時節を待つうちこそうき世なれ。